

Title	フランス革命及び帝政時代のイタリーに於ける社会的變化
Sub Title	
Author	市川, 誠一 (Ichikawa, Seiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.127(659)- 152(684)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フランス革命及び帝政時代のイタリア に於ける社會的變化

本篇は La Vita Italiana, durante la Rivoluzione francese e l'Impero, Milano, 1897 中の一講演 La trasformazione sociale, conferenza di Francesco S. Nitti を譯述したものである。

フランス革命の勃發した一七八九年から、君主の神權を回復したと信ぜられてゐるウィнна會議の開かれた一八一四年迄は、僅かに二十五年を經過したのみである。しかし此の二十五年間の生活は多事多端を極めた。此の間に生起せる事件は枚擧に遑なき程であると共に千種萬態であつた。又フランスの全ヨーロッパに於ける影響絶大なるものがあつた。それ故に此の四分の一世紀は、人類史上最も興味あり、且つ活氣に富む時代の一つとして、此の時代を善く研究した人士にも見えるので

ある。今や只單に此の二十五年間に於けるイタリアの生活は如何なるものであつたか、又此の時代の新事實、新思想によつて惹起決定せられたる社會的變化は如何なるものであつたかを、この講演會で繰返さんとすることは全く無駄な試みであり又全く意味のない企てであるやうに思はれる。それ故に、若しも私が舊來の研究方法から脱却して是迄餘りに政治や物語の皮相的見地から考究せられ、其の根本的内容に觸れること甚だ少なかつたかに思はれる是等の事柄の新解釋、新説明をなすことが可能であると烏滸がましくも全然自負するところがなく、又現在自負してゐないならば、諸君に話すことを敢てしなかつたであらう。

何故にフランスの革命はイタリアに深甚の影響を與へたか、又深甚な影響を與へたにも拘らず、フランス革命がイタリアに惹起した震動はフランス本國に於ける程猛烈でなかつたのは何故であるか。フランス本國に於ては屍山血河の慘を越えて初めて成し遂げられた様な社會變革が、イタリアに於ては遙に容易に成し遂げられたかに見え、又大障礙にも遭遇せず、堅固なる堤防を決する様なこともせずに濟んだのは何故であるか、イタリアに於いては概觀すれば上述の如くであつたが、之れに反し只ナポリに於てのみ其の衝撃や震動の猛烈であつたのは何故であつたか。

フランス革命は二大事實によつて特筆大書せられてゐる。封建制度の撤廢及び支配階級としてブルジョワ階級の興起擡頭即ち是である。イタリアに於ては、恐らくはナポリ及びシシリを除けば、封建制度は其の跡を絶たないまでも纔に餘喘を保つて居る有様であつた。そしてブルジョワ階級は既に一部は政權を掌握して居つた。従つてフランスからイタリアに押し寄せて來た澎湃たる

革命の波は、頑固な障礙に激突したり、又は突破征服するために是等の障礙を木葉微塵に打ち碎くにも及ばなかつた。しかし既にイタリアに行はれて居つた運動を促進し、恐らくは未だ起つて居らなかつたエネルギー及び希望を附與注入した。

過去の全制度を我々の政治的信念及び宗教的信念から離れて考察し、是等の嚴存して居つた時代を背景として研究する時に、普通其等の制度に歸せられてゐる非難攻撃す可き諸點は消滅するのみならず、又是等の制度も當時に於ては必要缺く可からざるものであつた様に思はれる。其等の諸制度は當時嚴存し、存續して居つたが故に必要缺く可からざるものであつた。

今日に於ては我々の人道的感情を傷けること甚しく、不法罪惡に見える奴隸制度すらが、其の當時に於ては單に必要であるのみならず、又有益のものであつた。此の奴隸制度が人類をして發展進歩することを得しめたからである。譬ひ自然の神祕を窺知せんと試みたり、精神と哲學的思辨の巍然たる絶頂に迄持ち揚げたりしたけれども、奴隸

制度撤廢に就いて考へた古代思想家はついで只の一人もなかつたといふ事實は、奴隸制度が撤廢せらるることが出来ない程有要にして必要缺く可らざるものであつたことを雄辯に物語るものである。奴隸は當時の様な發達程度の生産方法の行はれて居る時代に於ては、生産に缺く可からざる必要物であつた。それで往昔、時に、大理石や青銅に精神の最も高貴なる幻想を託した程の素晴らしい藝術家の一人であつた奴隸、其の燦然として卓絶せる作品は今日我々には尙無名のもので、名前は知られないけれども、兎に角かくの如き逸品を刻んだ奴隸の心中に於てすら、恐らく嘗つて解放自由の觀念が生起して來なかつたであらう。

今日に於ては我々の心に嫌惡の感を與へ、又我々は殆んど、何うしてこれ程長く存續することの出來たのか、其の理由を知るに苦しむ程の封建制度も、其のそも／＼の初めに於ては必要缺く可からざるものであつたのみならず、又有益のものであつた。封建制度は、人口比較的稀薄にして、通信、運輸の困難絶大、且つ人々相互間の聯絡結

合緊密ならずして、安全保障の缺如して居つた時代に起つたものである。

第九世紀、封建制度の盛時には五百萬人を出でず、カール大帝時代にはシャンソン・ド、ローランの詩的誇張にも拘はらず、約一千萬人にも満たなかつたフランスは、フランス革命直前既に二千四百萬人を超えて居つた。そして人口の増加と共に通信の便も進むし、運搬の便も發達した。次いで商業交易の發展から中等階級(第三階級)が發生して來た。そして全國民所得の相當の額が此の新興中等階級の懷中に流れ込んだ。

他の西洋文明諸國に於けるが如く、フランスに於ても總て是等の事柄は猛烈なる激動と共に突然發生したものではなく、緩慢に生成發達して來たものであつた。人類の總ての大運動中には、何等かの運命的な又無意識的なものが、包藏せられてゐる。明日の運命を知らないで、只其の收入を増大するため家來の穀物を都市に運んで賣捌いたり、又矢張り其の收入を増すために都市と田園との間に通信交通の便を開いた封建諸侯は、恐らく、運輸

交通から發生した一階級の創造や、是等の結果たる人口の増加が、是等の事柄を招來決定した彼等自身を没落破滅せしむる運命を有せるものなることを夢にも氣付かなかつた。フランス王は、封建制度が衰へ、且つ其の本來の目的を喪失するに従つて、之れとは反對に益々其の勢力を伸張して行つた。此の滔々たる大勢に捲き込まれて没落することを肯せざるも、微力能く之れに抗するを得なかつた貴族階級は、第三階級の數と富との増加から壓倒せられて漸次顛落の運命を辿つて居るのを見出だした。

扱て政權を有し、從來から富を所有して居つた一階級は、勢の漸次衰へるのを感じずに従つて、益頑迷固陋堪へられざるものとなつた。猛禽類中體軀最も小にして、しかも精悍執拗なる鳥の名前から、其の特徴に顧みて十八世紀にオベロー(チゴ隼)と稱せられたフランスの田舎貴族は之れが好個の例證である。一面富を有し、且つ政權を欲求した一階級によつて殆ど専ら行はれた一七八九年のフランス革命が、暴れ狂ふ颱風の様であつたの

は正しくこのためである。長期に互る頑強なる抵抗を一舉に粉碎征服せねばならなかつたからである。

之れに反してイタリーでは、封建制度から新しい制度に推移するのに殆ど暴力時代の介入を煩はさなかつた。フランスに於ては大革命が其の根強い封建制度に最後の一撃を與へた時に、イタリーに於ける封建制度は既に其の根本に於て崩壊して居つたと稱するを得た。イタリーに於ては恐らくは南イタリーを除き、封建制度は殆ど全く君主の御情の下に纔かに餘喘を保つ有様であつた。

封建制度が嘗つてイタリーに深い根を下したことがあつたか何うかも疑はしい。兎に角十四世紀に於て該制度は既に死んで居つた。當時ヴェニス貴族は貿易に従事して生活して居つたので、貴族といふも名のみで他と擇ぶところがなかつた。フロレンスの貴族も商業に従事するを恥じとせず、身を墮して市民階級の仲間となつて商業を營んだ。それ故に事實上既に彼等の元來屬して居つた階級と相違する階級に屬して居つた。恐らくは

人口密度の高度は最早十四世紀迄に、眞の封建制度が其處に存在し、且つ存續し得ることを許さなくなつた。

只ナポリ及びシシリーに於ては、一部は歴史的必然から、一部は更に遙にそれ以上に眞に地理的必然からも誘致せられた人口の稀薄なること、及び商業貿易の發達見る可きものがなかつたことは封建制度の更に長く存續し、更に強固になることを得しめた。自由民の隷屬化をも誘致した生活の安全、保護の必要は、南イタリアでは他處より遙に長く存續した。加ふるに南イタリアに於ける封建制度はノルマン人によつて十分に遺憾なく移植せられた。それ故に此の根深い南イタリアの封建制度を顛覆することを得るためには、遙に長歲月を必要とし、且つ遙に烈しい動搖を必然的に隨伴した。恐らくは正しく此の理由によつて、フランス革命はナポリに一七九九年の騷擾を誘發した。又それ故に、ブルボン家の在住して居つたため騷擾の勃發するを得なかつたシシリーに於ては、封建制度の弊害が絶えず復活嚴存して居つたことは疑

ひなきところである。此のシシリーの封建制度は譬ひ法律上其の存在を絶つて居るとはいへ、今日に於ても尙時には慣習や、人心中に其の面影を止めてゐる。

封建制度がフランスに於ては尙堅固であつた時に、少くとも尙頑強に抵抗を續けて居つた時に、イタリアに於ては概觀せば殆ど崩壞して居つた。記録によれば、一七八〇年國政に參與して居つたヴェニスの一千〇二十三人の貴族は、貴族政體を形成するには數が餘りに多過ぎたと云はれてゐる。自ら投機貿易に従事せざる時、又は父祖の遺産に徒食して居らなかつた時には（徒食者も存在してゐない譯ではなかつた）古の徳性を既に失つて居つたから貴族等は見榮や外聞もなく盛に雇傭口や職の空さを求めた。法王領に於ても、法王廳は既に數世紀前迄に封建制度の性質を蟬脱一變して居つた。富は少數者の手中に蓄積せられたが、しかし封建制度は最早や往古の力強い面影を何等有して居らなかつた。君主制の確立と、一七二〇年の法律は既にサルヂニヤ王國に於ける封建制度に最

後の引導を渡して了つた。ロンバルヂヤではオー  
ストリヤの支配と、尙更にスペインが竟に窒息せ  
しむることの出来なかつた自由の傳統とは、尙益々  
迅速に驥足を伸して行つた。トスカーナでは君主  
等の活動のみならず、此の國の性質そのものも亦  
(今日此處では豊富な農産物が少數者の手中に偏  
在せず、廣く分布して人民間に平均してゐるが、  
當時に於ても既に廣く散在して鈞合つて居つた)、  
封建制度の存續し得ることを阻止した。

只ナポリ及びシシリーに於てのみ、王との長い  
抗爭にも拘らず、其の勢力を滅殺せられたけれど  
も封建制度は尙根強く存續して居つた。そして次  
いで益々貪婪に、益々優勢になつて行つた。  
然らば何うしてかくの如き有様になることが出  
來たのか。

此處では往昔封建制度を生んだ原因が、少くも  
尙一部分働いて居つた。商賣で起つたといふよ  
りは寧ろ、奉公人や法律家から成つて居つた中間  
階級は、其素性そのものから當然不安固にして臆  
病な碌々たるものであつた。屢々不信の徒もあつ

たが、奉公人は大概主人に事へて財を積むに汲々  
たる有様であつた。しかし主人の地位に取つて代  
らう等とは夢にも考へなかつた。常に現状擁護に  
傾いて居つた法律家は(これは法律家の性質上常  
に當然のことである)、あはよくば貴族になり上  
らうといふ欲望と蓄財の希望とを抱くのみであつ  
た。

ブルボン家のカルロ三世は貴族及び教會を相手  
に頑強に抗爭した。そして封建諸侯は王を屈服せ  
しめんと力め、宗教上の勢力は王を制御せんと力  
めた。しかし一體如何になり得たか。内部に於け  
る活潑なる商業の缺如は、有力にして富有なる中  
間階級の形成を阻止した。カルロがナポリに來る  
迄、王國內には馬車の通じ得る道路すら殆んど全  
く存しない憫然たる有様であつた。只ナポリより  
ローマへ通ずる道路と、恐らくはナポリよりフォツ  
ジャへの道が一部あるのみであつた。カルロは數  
本の道路を開設することに着手した。しかし其の  
殆んど全部は王の狩獵用のものであつた。恐らく  
は人民の幸福は君主の愉快とするところではなか

つたからである。

一七三四年にはナポリ王國に二千二百六十五餘りの市町村があつた。其の中二千二百二十六は封建諸侯に屬し、僅か五十九が王國に屬し、王の法律に比較的より多く服して居つた。一七八六年即ちフランス革命破裂三ヶ年前フェルデナンド一世がナポリに君臨して居つた時も亦、ブルボン家が封建諸侯に挑んだ烈しい抗爭、及び諸侯の羈絆から脱し得る様諸都市に與へられた援助にも拘らず、尙一千八百八十一の封建都市が殘存して居つた。

シシリに於ける封建諸侯は尙更に有力にして大膽であつた。彼等はフランス革命後も尙シシリ島の半分以上を領有して居つた（フランス革命の大暴風雨も彼等を潰滅せしめることが出来なかつた）。非常に煩瑣な封建的慣習の大部分は過去と同じ様にシシリに行はれて居つた。

ナポリのブルボン王等は（彼等の功罪に就いて如何様の判定が下さるにしても）、恐らくは意識的に、少くとも漠然たる本能から、封建制度の顛覆せらるゝに至る様封建諸侯制御に力めて來た。封

建諸侯は王權伸張の上に危険なる障礙をなして居つたと同時に、生産形體を固定せしめ、更に人々の増進せる新欲望の充足せられることを肯じなかつた。

フランスに於ける革命は亂暴な形態をとり大いに猛威を振つた。その理由は、一方に於て中間階級が既に全く形成せられて居つたと同時に、他方古代の慣習に基礎を置く封建制度は、王權の伸張蠶食にも拘らず依然強盛を誇つて居つたからである。

イタリに於ては、封建制度はイタリ半島の大部分に於て、よし法律上にはなほ存して居つたとしても、事實上は既に亡んで了つて居つた。それでフランス革命は、ナポリの如く封建制度の尙頑強に存續して居つた處に、より力強く反響した。

ナポリ王國の人口は十一世紀以來大變に増加して居つた。之れに反して農業經營の方は其の變革を阻止した封建制度のために、殆んど、或は全然變化することなく舊態依然たる状態であつた。生産に新なる方途を開き、又既に富を所有し、或は



富を所有し初めたその階級に、政權を確實に與へる新形體の生せなければならぬ必至の情勢にあつた。

それ故に過去の全十八世紀に亘り、君主が殆んど至るところに封建諸侯と公然抗爭をして居つたのを見るのである。ナポリではカルロ三世及びフェルディナンド四世が封建諸侯の司法權を抑へ、教會の財産を制限し、大學の自由解放運動を援助してゐる。

それ故にこそ我々は次の様な妙な事實を目撃するのである。一方フランスに於ては貴族階級は殆んど全部革命に對して反抗して居るが、他方王權がより以上封土を壓迫制御して居つたイタリアに於ては、貴族階級は屢々革命運動に参加してゐる。恐らくはナポリの歴史を飾る最も美しいページであつた紀元一七九九年のナポリ革命は、一部君主の壓迫制御を脱せんと欲してゐる農夫並びに封建諸士、及び法律家、換言すれば權力慾に惱まされてゐる中間階級構成分子により、他の一部は王權そのものに不満を抱いて居つた貴族自らによつて

なされたものである。

一七八九年の革命がフランスに勃發した時に此の報に接した全ヨーロッパの感銘は絶大なるものであつた。バスチーユ監獄占領の報は全ての志士仁人によつて歡呼の聲を以て迎へられた。各人は殆んど例外なくパリーの此の政治監内に多少の關心を持ち、須く解放せられなければならないと感じて居つた矢先に此の報に接したからである。

我々は恐らく十八世紀に於けるイタリアの智的精神的覺醒を少し誇張し過ぎた嫌ひがある。吾人は今誇張し過ぎてゐるといつた。それは恚うである。即ち其の刺戟はフランスからイタリアに來たものであるとするも、イタリアに於ける覺醒状態は既に可成進んで居つたものであつて、オルテス、フィランジェリ、ジェノヴェーゼ、ベッカリヤ等の如き我が大思想家や、アルフィエリ、パリーニの如き我が大文學者等が既に革命の先驅をなして居つたと云ふのである。

しかし右の言は全部真相を穿つて居るものではない。イタリアといふ國は、凡ゆる智的大膽さも

最高教養階級の懷疑思想の中にその鋭鋒を失つた國柄であつた。例へ若干の熱情的思想家もないではなかつたが、支配階級及び彼等の後繼者たらんその野望を抱いて居つた階級は、敢爲進取の氣魄に缺けて居つた國柄であつた。

前十八世紀の君主等はイタリーでは屢々疑ひなく彼等の人民よりはより大膽にして、より自由的思想を抱いて居りしやに見える。トスカナのレオポルド二世、オーストリアのジョセフ二世、ナポリのカルロ三世及び最後にフェルチナンド四世等は、人民の要望せるものより遙に先き走つた經綸施設を行つてゐる。それ故に或時には寧ろ彼等は、ナポリ及び特にシシリに勃發した様に、彼等の改革的猛烈さそのものによつて怨嗟の府となつた様の有様である。シシリでは總督ドメーニコ、カラッチオーロがジャコバン的不敵大膽さを以て、封建制度の基礎そのものの攻撃破壊を敢行したがために不平不満を醸成するに至つたものである。オーストリアのジョセフ二世はロンバルヂに幾多の卓越せる進歩的法律を與へた。封建的勢力を

潰滅せしめ、全市民は法律の前に平等たる可きことに同意を與へ、地方行政を刷新し、全力を傾倒して、優秀なる文化を展開せしめた。彼は賢明なる専制主義の時代先驅者であつた。上記の事柄總ては思想家の活動によつてなされたものではなく寧ろ彼等の意に反してなされたものであつた。官職が凡ての人に公開せられた時に、ピエートロ・ヴェルリすら之れを悲んだ。此の哲學者は貴族出身ならざる將校の軍隊に出現することを許したとて皇帝の非難さへ敢てなした。『名譽廉恥の感情は貴族階級間に於ては教育されて居るが、他の階級間には絶えて此の事がないからである』と彼は稱した。

一七七六年マリヤ・テレサが拷問を廢止し、又漸次死刑をも廢止せんと欲した時に、ロンバルヂの最高有識者等は之れに反對した。元老院はガブリエレ・ヴェルリの説に基いて、犯罪の重大性と速に自白せしめることの緊急なることは、拷問行使の必要を示すものであると稱して女帝に反對した。今日に於ても尙當時の傑出せる人物に思はれる

ピエートロ・ヴェルリは、只手を拱いて外部より來る改革に従はしめるのみであつたが、それも微温的であり敬遠主義的であつた。彼は改革が外部より天降りに課せられた時のみ謳歌したが、餘り急進的に見える時には、遠慮なく自分の不平不満を吐露した。

全然フランス的精神を持ち、本人も告白して居るが様に、モンテスキュー及びエルヴェシウスの感化の下にあつたチエザレ、ベッカリヤすらも亦先驅者であるよりは寧ろ天降りに來る改革に厭々ながら追隨するものであるかの様に見えた。死刑廢止案を審議するため、ジョセフ二世によつて任命せられた會議員であり、報告者であつたベッカリヤは、弑逆罪及び内亂罪の場合には死刑執行の必要缺く可からざるものなることを信じた。殆んど時を同じうして此の弑逆罪及び内亂罪の二つの場合にも亦、オーストリア出身の君主、トスカナ・レオポルドは自ら進んで死刑を廢止して了つた。

我々が自ら獨り快とする虚榮心から賞揚して來た政治家、哲學者、經濟學者等すらも、フランス

の著者等の思想的大膽不敵さの幾分をも殆んど持ち合せて居らなかつた。彼等は殆んど常に君主によつて天下りに彼等に課せられた改革に追隨するため、古いものを新しいものに適應せしめる不斷の努力をなしたものに過ぎなかつた。

カザノーヴァの回顧録及び近世史が、十八世紀末葉に於ては墮落及び遊樂の都として描いてゐるヴェネチア、フランス革命の前夜に只一人の卓越せる思想家、只一人の新時代の豫言者を出して居らない。

カルロ・ゴルドーニ、及びカルロ・ゴッチは、實は舊時代の後繼者に過ぎない。カルロ・ゴルドーニが自ら求めずして、恐らくは又自ら意識することさへなしに改革者になつてゐるとするならば、それは彼が宮廷生活の實狀を舞臺に上場せること、及び其の實狀が決して容易く世人の満足を買ふ性質のものでなかつたことに由來するものである。

最近非常に賞揚されてゐる、特に嘗つて彼の著書を披見したことの無い人によつて賞揚されてゐるかの漠然として朦朧たるジンマリア・オルテス

は、常に朦朧たるが故に常に深遠なるが如く見える此の漠然として暖味なる律僧は、更に後恐らくマルサスの理論であつたものを瞥見した後は、家族、教會及び聖地に保管されてある死者の財産や委託事項を防禦することより外提議することを知らなかつた。彼の見窄しい修道院中の森嚴なる静寂裡に、彼の心中に湧起する恐ろしい問題に面しても、修道院のソップを増加する解答より以外の解答を與へることを欲しなかつた。彼の有名な説話中の騎士アンドレア、トロロンが（共和國の弊害を看破する程の明敏さを有して居つたが、我が家の紊亂を看破するの明がなかつた者）古い制度形式の没落を斷言した時に、彼は何等の救済策を指示することが出来なかつた。恐らく救済策を指示することは、彼には徒勞であると思はれたのであらう。

拱手傍觀の心構へには敢行はない。しかし時には、トスカナに於ける如く、進歩改革的の君主等の仕事、僧正スキピオネ・ディ・リッチの如き明哲な心の持主によつて支持せられることもないでは

なかつた。此の僧正は古代人の面影を有し、豫言者や使徒の心境を有せる人であつた。しかし是れは唯一の例外である。

概言せば、一方に於ては新興階級の新しい欲求が是認せられながら、他方に於ては是等の欲求を代辨唱道せんと敢て試みる者が皆無であるといふことは、次の如き奇妙な事實を尙更に助長せるものである。改革が天降り、人民は寧ろ厭々ながら改革を受け入れてゐるといふこと即ち是れである。

十八世紀に於てイタリアの最も有力なる思想家の若干を有して居つたナポリは又彼等の先驅者をも發見した。ヴィーコを見ん。フランス革命爆發前約五十年前に逝ける彼は、彼の時代より余りに進んで居つた。一つの科學に非ずして數個の科學を建設せるヴィーコ、又如何にも新らしい科學を語つたヴィーコは、彼と同時代の人々に殆んど顧みられなかつた。彼は彼等の無關心を征服することが出来ず、無關心の人々の間に慘めな生活を送つた。彼は内氣の人であつた。そして運命の冷酷なる仕

打を甘受した。

しかし當時の最高識者であつたジャンノーネも、ガリアニも、ジエノヴェジも、又バガーノすらも、フランス革命の際に於ても、既に完成しつゝあつた變革を殆んど豫見しなかつた。

ジャンノーネは眞に偉大なる改革的人物であつた。しかし乍ら教會の優越權との抗爭に没頭して他を顧みる餘裕がなかつた。

ガリアーニは或る事柄に信仰を持つには、餘りに懷疑的であり、又餘りに巧智であつた。

一七六四年タムツチに次の様に書き送つた。「恐らくは結局フランス張りの議會を持たないより、持つた方が良い。しかも專制的色彩の薄い王國の君主等に於ては、別に議會の創立を更に遅引せしめたとして悪いことではない」と。君主に對しては只單に易々諾々たる服従のみをなす可しと説いた此の温雅にして愉快なる僧院長は、實際に於ては君主の仁慈を垂れる様願つた。それ故彼は君主等の愚行の精神的共犯者とも稱す可きであつた。經濟學者は只の一言も非難攻撃の言を吐かず、憤懣

の意を漏らさなかつた。母マリア、テレサの男性的、激しい激情を有して居つたが、母の小才を有して居らなかつたオーストリア皇女マリア・カロリナが、フェルデナンド四世と結婚するために、贅を極めた百二十枚の衣服を整へ、數百萬金を散じた時に、快活の僧院長は只「君主等が愚行を演じて居るが、しかし此處には御金が流れ込んで來る」ことを觀たのみであつた。

ガリアーニ程著名ではなかつたけれども、しかし彼より積極的であつたのは、アントニオ・ジュノヴェーシ其の人である。ラテン語の無智の甚しく表明せられて居つたかのナポリ大學で、イタリー語で教授することを敢行した此の小膽な僧院長は冒險者ガリアーニより、より以上の積極さと誠實ささを持ち合はして居つた。ガリアーニは其の著「正義と正直の人の説話と哲學」中に於て立憲政體と、解放統一された我々の共通の母國イタリーとを欲しては居つたけれども、人民の適度なる隸屬の必要を認めることを辭さなかつた。

ジノヴェーシは中間階級の發達と組織に最も適

して居る様に見えない制度は辯護しなかつた。彼は所有地賣買分割の自由、交易の自由と保證、勞働の自由を唱道した。物質的な或は直接的な収入をあげないが、しかし彼の言葉を借りて云へば、社會に寄與して居る者の間に、財産収入で徒食せるものを置くことを躊躇しなかつた。彼は庶民を信用しなかつた。彼は寧ろ縁遠い政府當局からそれを期待した。彼は改革者たるよりも寧ろ舊時代と新時代間の過渡的橋渡的人物であつた。彼の改革意見は傳統の羈絆を脱せるものではなかつた。彼は改革の、下の方から來るよりも上から天降りに來ることをよしとした。茲には只彼の無識と缺點とが見られる。

既にフランス革命が爆發した時、人心の中には一七九九年のナポリ革命が準備せられて居た時、更に又彼が其のために當然生命を弊履の如く捨つ可きであつた是等の事實に既に直面して居つた時に、封建制度を擁護し、其の必要なる理由を指摘したマリオ、バガーノの思想的役割の如何なるものであつたかは、云はずもがなである。

バスチーユ監獄占領數ヶ月前、僅か三十六才で溘焉として逝いたフイランジェーリは、貴族であつたが凡てのデモクラチックの思想を受け入れ、積極的に敢行した唯一の人であるかの如く見える。彼は支配階級の人であつたから、他の支配階級に屬する人であつたから、他の支配階級に屬する人と同様、上から天降りの改革を期待した。しかし彼が上からの天降りの改革を期待することは全然誤謬でもなかつた。何故ならば少くともイタリアに於ては、君主等の活動が思想家等のそれより大膽にして積極的に見えもし、又事實さうでもあつたからである。

イタリア半島各地の文學者の間に於ても亦、此の改革的信念が缺如して居つた。こは十八世紀のフランス文學の大活動と善き對照をなすものである。其の精神から庶民の激情が奔溢し、其の著書には常にルッソーの思想が浸透してゐた偉人パリニを恐らく除けば、他の一切の人々は大勢を洞察するの明なきか、或は明あるも此の大勢の渦中に身を投じて之れを指導するの進取敢爲の氣象に

缺くるところがあつた。偉大なる人物であつたアルフィエーリさへも古代ギリシヤ人やローマ人の思想の間を彷徨してゐるのみであつた。彼の専制君主は現實に即せざる架空の創作物であつた。彼の共和國は時代の要求に全然没交渉のものであつた。古典的にして他を輕蔑するの風ある彼は、フランス革命に對して理解なく嫌惡に滿てる言を投じたのみであつた。

譬ひアルフィエーリの精神が、架空的な専制君主に對して若干攻撃の銳鋒を向けてゐる點ありとするも、現實に於けるイタリーの専制君主は、外國の一切の専制君主以上に、人民自身よりも新規を求むるに急であり、改革慾が旺盛であつたと斷言して憚らざるものである。イタリーの君主等には何等鼓舞するものありしやにも見受けられず、識者等の鞭撻もなく、人民の強制もなく、彼等は云はゞ内的衝動から自發的に改革政策を採つたものである。是等の改革策は、フランスには未だ行はれて居らず、之れが實行に當つては封建制度の基礎を強固にして勢大なるため、一七八九年の革命に非

常な暴力的特色を與へねばならなかつたものである。教會財産の制限、財政上の特權の廢止、裁判權を國家の權利として認め、封建諸侯の權利として認めざるに至つたこと、封建諸侯の行政權の制限など、是等は凡てイタリーの君主等の自發的意志によつて行はれたものであつた。

かくして特にナポリに於て、彼等の權力を制限せられたことに憤懣を禁じ得ない貴族等が、革命を歓迎するといふ奇妙な現象が起つたのである。

そして此の革命が、勃發した時、且つ此の革命が第三階級の存在威力を確認せしめる性質のものであるに拘らず、貴族等は多數之れに参加活動した。一七九九年のナポリ革命に活躍せる人物の大部は貴族及び僧侶か或は法律家であつた。地方に於けるナポリ革命の反響は、君主の東縛を脱せんと欲する地主及び封建諸士の間特に大であつた。

フランス革命が爆發した時、イタリーに於ける貴族、僧侶、市民階級、一般庶民階級の之れを迎へる度合には非常の差等があつた。一般庶民階級は事實上殆んど參加しなかつた。彼等は自己の利

害のため蹴起するには餘りに無智であり、餘りに窮迫沮喪せる状態にあつた。しかし自由革命主義の旗下に走る可きか、君主の旗下に走る可きか、何れかに決定せねばならない場合には寧ろ君主のため、犬馬の勞を取つた。彼等は無智であつたのみならず、又突然革命によつて起つたところの變革は彼等の利益に副はないものであるといふ忠告を盲信した。

俗世的諸侯のものであれ、教會のものであれ、何れにしても封土の住民は、特に教會の封土の住民は彼等が今日持つて居らないところのものを當時持つて居つた。即ち慣習法により生存權が彼等に保證せられて居つた。それ故に若しも彼等が封土の變革せられることを阻止するならば、此の慣習法は、譬ひ劣等のものではあるとも、其の生存に必要なる最低限度を、相變らず與へる筈であつた。封建諸侯、僧侶、市民階級の各異なる利害を代表してゐる三階級は、如何なる性質のものであるにせよ、甚しい變革が起つた時に、事實危惧の心を懷きながら革命を歓迎した。此の變革に對して

三階級は何れも不満であつたからである。第三階級は、政權に對して野心を懷き、更に遙かに多く自分等の階級のものが政權に參與することを欲せるが故であつた。封建諸侯、僧侶の二階級は變化せる制度及び王權の伸長に於て彼等自身の衰亡を看取したからであつた。

封建諸侯は唯一の支配階級として永く存續することの出来ない状態にあつた。最早彼等丈け單獨で戰をする實力がないので、ヴェネチヤでは貴族等は見榮も外聞も捨て、職を求めたり、大陸を掠めたりする有様であつた。ローマに於ては法王の支配權の下に逼塞して僅かに餘喘を保つてゐる有様であつた。ピエモンテでは既に一七二〇年の法律で其の基礎を覆されたが、尙蒙昧にして好戰的であつた。シシリイ及びナポリでは君主によつて其の勢を滅殺されたが、未だ屈服せられる迄には至つて居らなかつたので、頻りにありし日の勢威を挽回せんと力めて居つた。

可憐な懷疑思想が少しではあるが至る處に行はれて居つた。社會の諸關係は弛緩して居つた。特



にヴェネチヤ及びロンバルディアの貴族間に於ては偕老同穴の夫婦の誓をするのを市民階級の道徳として考へられて居るのを見る。最も高貴な貴族の淑女、紳士迄が、ヴォルテールやルッソーの思想に就いて議論の花を咲かすことも珍らしい事ではなかつた。修道院内の談話の中に於てさへ、フランスの哲學は日常の議論と共に入り込んで來た。丁度今日尖端的貴婦人がトルストイを談じて居るが様に、當時はルッソーを談じて居つた。文明に挑戦するために自然の状態に歸る事を主張せる此の二人の思想家即ちトルストイとルッソーの説の間、及びロシアとフランスの二廢類社會に彼等を生んだ原因間には、熟視すれば最初思つたよりも遙に大なる類似點がある。王權が伸張して貴族の權力を滅殺しやうと力めれば力める程、貴族等は益々新思想に接近して之れを歓迎鼓舞するのを見るが如きは即ち是れである。

僧侶は異常なる富裕状態にあつたが、彼等は殆んど等しく無智であつた。君主等は皆此の僧侶を嫌惡して居つたが、僧侶を制御し得たに過ぎず、

確に其の權力を滅殺し得る迄には至らなかつた。

正確なる統計によれば、一七六八年ヴェネチヤ國に於ては僅か二百六十五萬五千四百八十四人の中ギリシヤ正教派の僧侶を除いて四萬五千七百七十三人の僧侶があり、年收四百二十七萬四千四百六十デユカートを得て居つた。此のヴェネチヤの僧侶と遜色なく富裕にして無慚の生活をなし、又恐らくは彼等以上に蒙昧無智であつたピエモンテの僧侶階級は非常な權力を振つて居つた。トスカナでは既にルチエライが少くとも百人に三人の僧侶が居つたと稱して居る程であつた。フランス革命の後に於ても亦全國年收の七分の一は各種僧侶の懷に入つて居つたことは確實である。ローマ法王領に於ては僧侶が凡てであつた。彼等が土地の大部分を所有して居つた。ナポリ王國に於ける僧侶の財産の増加は更に異常なるものであつた。大陸方面に於ては約一千二百萬デユカートに増加し、シリリアでは少くとも七八百萬デユカートに激増して居るのを見る。かくの如く龐大な富と權力とを有し、鬭争の必要なく、卓越せる精神上的の權能を行

使用する義務もなかつたことは、少數の例外を除き僧侶をして貪慾にして腐敗墮落せるものたらしめた。

衰運を辿り懷疑的になつて居る封建貴族と、其れ自身の勢威から墮落の魔道に顛落して居つた僧侶の間に今や市民階級が入つて來た。彼等は長い幾世紀もの間交易を禁ぜられ、重税の下に呻吟して凡ゆる發達を阻止せられて居つた。封建諸侯、僧侶の財産が幾多の免稅特權を有して居つたのは、専ら第三階級の發達を阻止する必要から決定せられたものであつた。しかるに封建諸侯と君主間との抗爭を利用して勢力の伸張を圖つたのが此の市民階級であつた。此の市民階級は十八世紀中フランスより以前、既にイタリアに於て有力なものとなつて居つた。

ナポリ市の市民階級は、一方封建諸侯の利害と全然異なる利害を代表して居つたが、他方封建制度の有用なる部分のみならず、有害なる部分をも擁護する立場に立つことも誘致せられた人々から成つて居つた。五世紀の間、ナポリの法律家の歴

史は大部分ナポリ王國の歴史であつたといふも過言ではない。彼等は時に君主すら強要することの出來た程、多數の人數を擁し、喧騒を極め、勢威を振ふ一階級をなして居つた。法律家が非常に多いことは凡ゆる争ひを一層紛糾せしめた。元來議論に長じて居つた南イタリアの智的才能によつて愈、其の傾向が助長せられた。カステル、カプアノ（カプア城）のサロンには今日の討論家群と云つた多くの富者と貧者とが存して居つた。そして多くは相互に反目して居つた。彼等は利益のあるものならば如何なるものをも辯護した。富者の利害が取扱はれば、取扱はれる程、其の辯護者の數を増した。彼等をナポリ王國の疾病であると呼んだコルレッタは如何にして此の法律家の階級から中間階級が生れたかを説いてゐる。眞に傳染病の様に有害であつたと共に、其の南イタリアの智識界に流した有害なる影響は、今日も尙唾棄すべきものとされてゐる此の階級は、實にウィンズピアの云へるが如く裁判及び行政の舊制度の藩屏であつた。譬ひかくの如く彼等は害毒を流したにせ

よ、彼等の不斷の議論活動と、古代に由來する權利のため常に正當なる理由を發見力說せることにより、又大に裨益貢獻するところもあつた。君主と封建諸侯との間に争ひが起つた時に（最初は

暗闘の形をとつて居つたが後には殆んど公然たる争となつた）、封建諸侯が嘗つて有したことの無い權利を法理上有して居るといふ理由を發見した是等の法律家は、又事實上封建諸侯が持つて居つた權利が法理上否認せらる可きものであるといふ理由も亦發見することが出來た。君主は恐らく是等法律家の援助なかりせば、かくの如き成果を能く收めることが出來なかつたであらう。醸すこと及び醱酵することが生命を生ずるが如く、法律家の囂々たる論議から、覺醒及び生命を生む精神の醱酵素が生ずることになつた。生命といふものは殆んど常に腐敗と分解の現象に過ぎない様である。墮落せる法律家の階級は、其の醱酵素と共に智的覺醒に對して力ある刺戟を與へた。封建的權利の本質、中世の暴力、武力時代に取り決められた契約の効力、或る權利の時効により消滅せざること

等を論議せる外、竟には最初到底論議し得ざるかの如く見えた事項迄も論ずるに至つた。市民平等の思想を發生せしめ、變革を大に助けたのは實は此の種の論議であつたのである。

此の中間階級の構成そのものの性質から、中間階級は迅速なる飛躍、不敵な大膽さを持つことが出來なかつたのみならず、又改革に就いて語る時も亦法律家的孤疑逡巡性に捉はれて居つた。それで彼等が陰に陽に抗争して居つた君主等より改新の大勢に順應してゐないことが證せられた。

非常にいろ／＼の要素から構成せられて居つた十八世紀末葉のイタリーの中間階級は、交易より寧ろ法廷、教會によつて生計を立てて居つた。裁判官候補者や、不平の僧侶や熱情的な辯護士等の妙な寄せ集めであるイタリーの中間階級は、單純にフランスの第三階級の概念を以て律することは不可能である。

一七九九年のナポリの革命は、ナポリ史上最も光彩あるページをなしてゐる。それはイタリー人が大義の身を挺して死に得る技を忘れて居らなか

つたといふことを證明するものであるからである  
(ナポリに於ては恐らく可成昔から絶えてなかつた始めて見られた事柄である)。ナポリ革命そのものは他に見ることの出来ない特質を持つて居つた。それは此の革命が第三階級の威力、存在を明確に肯定せしめるに至つたといふ様のものでは全然なく、既に論述せるが如く、大部分君主が是迄挑戦して來た其等の利害關係人に由つて事實激發せられたものであつたからである。

一七九九年六月二十九日から一八〇〇年九月十一日に至る迄夥しい犠牲者の中で(カラッチョーロ提督と共に初より、ルイザ・モリーネス・サンフェリーチユで了る大部隊の犠牲者)、特に三階級のものが斷然多數を占めてゐる。貴族、僧侶、法律家即ち是である。一方地方では地主や封建諸士等が彼等の經濟的地位擁護安定を欲して叛亂を起したが、他方、抗爭の最も激烈であつた都市では、其の利益を最も侵害せられ、脅やかされた者等が政權を掌握せんと欲する徒と相結んで叛亂を起した。

ナポリで處刑せられた九十九人の中、十四人は貴族、十五人は僧侶であり、二十人余りは法律家であつた。カルロ三世及び更にフェルディナンド四世は、賢明なる大臣の輔弼により、貴族に徹底的打撃を與へ、且つ教會の勢力を制御した。そして更に峻嚴なる法律及び更に大なる訓令が發せられた時、貴族、僧侶、法律家等は共に此の取締規則の下に苦しまなければならなかつたが、特に最も此の厄を蒙つたのは法律家の階級であつた。フランス革命の爆發したその年、フェルディナンド四世は氣紛れ及び新奇なものを欲する心からサンレウチオの半共產主義的植民地を創設した。彼は革命前に於ては、革命後の彼の暴虐なる臆病を雄辯に物語るものであり、又彼の醜名を喧傳せしめた其等の不評なる暴壓手段を行使せず、又恐らくはその考へさへも有しては居らなかつた。

第三階級が自己の利益、要望を主張せんと欲した時に、少くとも南イタリアに於ては、此の階級は法律上のイデオロギイを盛んに亂用する一部のものに因つてのみ代表されて居つた。そして他の

彼等の上位にある封建貴族、僧侶の二階級は自分等の立場から彼等と共同戦線を張らんと力めたに過ぎない。少くとも君主の過激なる改革によつて、不平不満に堪へない部分の彼等と共同戦線を張らんと力めた。

封建貴族階級に屬してゐるナポリの十四人の處刑者の中で最も名門のものは次の如くであつた。

即ちアリアーノ公ジエンナード、セルラ、ルーヴォ伯エットーレ、カラッファ、ジエンツァーノ侯フィリップポ、デメ、マリーニ、コルレート侯ヂッゼッペ、リアリオ、スフォルツァ、ペトラストルニーナ侯フランチェスコ、フェデリッチ、ストロンゴリ公フェルヂナンド、ピニアテルリ及びマリオ、ピニアテルリ其他の名門勢家の封建貴族であつた。彼等の或者は全くの青年であつた。デメ、マリーニ及びリアリオスフォルツァは漸く二十一才であつた、ジエンナード、セルラは二十五才、マリオ、ピニアテルリは二十六才であつた。

前述の如く正に十五人の僧侶の所刑者があつたが、彼等の中には次の様な輝ける生活と高貴なる

精神をもつて著はれてゐる人達が居つた。教父デメ、メオ、デイ、クロチフェリヤ、フランチェスコ、コンフォルツァ師、ヴィンチンツォ、トロイヅ師、ジウゼッペ、グアールターチ師、エウゼビオ、スコッチ師等の大學教授等即ち是れである、又セヴェーロ、カブート、イグナツィオ、ファルコニエーリ、ミケール、グラナータ、ニコラ、パチフィーコ等の僧侶があつた。是等の人々も亦教職に關係し、衆の儀表たるに恥しからぬ生活を送つて居つたものである。

しかしナポリ革命の犠牲者の大部分は辯護士其他の法律家階級の人達であつた。彼等の中で特に名あるものは、フランチェスコ・マリオ、バガリーノニコロ、カルロマニオ、二十九才にして既に、誤謬と鋭い奇智とに富んで居る彼の「政治的思想家」を書いたヴィンチンツォ、ルッソ、及びジオルジオ、ピリアチェルリ等であつた。辯論による勝利は彼等に安全な大道を開いた。

ナポリの革命運動に統一を與へて、力あるものたらしめることを阻止したものは此の多様な中

間階級の構成組織であつた。フランスに於ける第三階級は自己の存在の宣言に初まり、次いで瞬く間に封建制度を打倒廢止し、彼等の發達を妨げた一切の束縛を芟除した。之れに反してナポリの革命はフランスのその様に果敢に斷行せず、又果敢に斷ずることを欲しなかつた。

ナポリ革命は敢爲に出ることが實は出来なかつたのである。ナポリ王國內に於ける封建制度はフランスからやつて來た征服者たる君主ジョゼフ、ポナパルトによつて一八〇六年廢止せられた。君主等の改革的激しさに對する僧侶及び封建貴族の不平不満が、如何にして非常に多様な諸要素を驅つて君主に對して相結び共同戦線を張らしめるに至つたかを示すものこそは、ナポリの眞に特異なる事項である。もともとは是等の諸要素は共同の究極的目的のために提携したものでないことは勿論である。

フランス革命がイタリーに及ぼせる影響は只單に新思想を移入したといふことのみならず、又特にかのジャコバンの激烈さを持ち込んだといふこ

とであつた。此のジャコバンの兇暴は一方に於て幾多の奇激と誤謬とを伴つて居つたにも拘らず、又他方に於ては革命達成のため缺如して居つた唯一のものは正しく果敢に斷行せしめるエネルギーであつたイタリーに、此の敢爲を導く新生命を注入したに相違ない。イタリー人は余りに傳統に捉はる、余りに過去に執着して居つた。爲され得るベターなことは寧ろ古へ歸ることであると信ぜられた。

一軍曹に年金を與ふ可きか否かを決するため、夜中も亦引き續き開かれて居つたルッカの元老院の場合は、當時のイタリーの狀態から見て首肯せられ得る點を多分に表はして居るものである。

今や一舉にして過去の凡ゆる傳統を葬り去つたフランスの様子は、恰もエネルギーの入れ替へが行はれたかの如くであつた。

ヴェルクは革命の數年前、貴族出の將校たらざるものが、能く將校としての勇氣と體面とを保持する人たり得るや否やを疑つたものである。しかる

にフランス革命の爆發は、人は自己の力を意識する時には、下層階級から貴族階級より多くの人材が輩出し、そして是等の人材が上級の指導的地位に登らんとより熾烈なる熱望を抱くものなることを、マザックと示して呉れた。フランス革命及び

帝政時代の大將軍連は、恥しめ虐られた境遇の間に生れた、云はゞ功成り名遂げる其の日迄全く世間の視聽外にあつた農夫や労働者の子供である。クレベ、オージュロー、スールは農夫の子であつた。スールは最初一兵卒に過ぎなかつた。ジュールダンは呉服商を營んで居つたものである。オーシユは最下層階級の出であつた。酒屋の子であるマッセーナは革命前迄厩丁をなして居つた。マルソーは軍曹であつた。ランヌは染物師の年期奉公人であつた。ベルナルドットは曹長であつた。ミユラーは宿屋の息子で神學校の學生であつた。グーヴィオン、サンジールは繪を教へて居つた。水車屋の息子であつたルフェーヴルは軍曹であつた。ネーは公證人の書記であつた。フランス革命の全部或は殆んど全部の大將軍連は下級兵士からの出であ

り、下層階級の出身であつた。フランスの貴族階級はフランス革命以來唯一人のコンデ將軍を出したのみであつた。革命の民主主義は少くとも庶民階級から二十人の赫々たる將軍を輩出した。

凡て是等の事柄は傳統的精神を葬むるに至つた。そしてイタリーの様な國に於ては、一舉にして舊社會の根底を覆さねばならなかつた。未だ統一の必要も、國民の尊嚴をも當時感じなかつた此のイタリー人は、民主的專制君主の下に統一や國民の覺醒を得初めねばならなかつた。

幾世紀の間、立法者の心得と、賢者の智は既に將來を達觀することではなくて古に歸ることであつた。しかるに革命は是等のもの一切を一擲した。我々はイタリーに發布せられたフランス人の法律中に、川を山と混同したり、山を都市と間違つてゐる程倉卒に事が運ばれたことを發見する時嗤ふ。しかし乍ら此の改革的性急さ及び猛烈さこそは、血液の入れ替への如き働きをなしたものである。

平等及び自由を説きつゝ此のフランスの革命軍

は我々を掠めるためにイタリアへ南下して來た。しかし他面彼等の主義主張と共にイタリアの舊式社會に革命の酵母を撒き、彼等の活動と共にイタリア人の精神を刺戟して今迄睡眠状態にあつた國民的意識を覺醒せしむるに貢獻するところがあつた。

逐日君主が顛覆せられ、又逐日君主が新につくられるのを目撃したイタリア人は、眼を開いて、自分自身の中に信念を獲得し、そして隸屬は永久的のものにあらざることを信ずるに至つた。フランス人はイタリアの國を略奪したけれども、道路を通じ、學校を盛に各地に建て、イタリア人の休止状態にあるエネルギーをゆり覺まし、將來に對する信念に點火するところがあつた。

イタリアは嘗つて眞の宗教戰爭を経験したことがなかつた。法王廳がイタリアの眞中にあるといふことが、外國では流血の慘を経て護持長養されたかの理想を殺して了つた。生き得る術より難事である死に得る術は、或る世を捨てた孤獨の思想家、又は或る世を捨てた孤獨の使徒のみが今迄は

心得てゐたものであつた。

しかるに恐らくは革命が初めて死に對する眞の輕侮の觀念を與へた。從來は卑屈なる法律家や臆病なる教師のみの特權物であるかに見えた文明や智識は、處刑者の名簿を大ならしめ、多數の犠牲者をつくるに役立ち、又血で彩られた地から復讐の赤い花を咲かせるに貢獻した。ブルボン家はナポリに於て改革主義者や大膽なる不敵の連中の先驅をなし、或點に於ては革命の露拂ひを勤めた。しかし一七九九年の叛亂は、最初臆して居つたが、次いで慘酷になつたブルボン家の人々に、彈壓の必要を痛感せしめた。しかし此の彈壓によりて、自由に對する熱望及び犠牲の傳統が生れ、且つスク／＼と伸びて行つた。

フランスの模範は屢々、我がイタリアの犠牲者に遺憾なく死を恐れざるの風を與へたるのみならず、又庶民の大受難に於てのみ見え出されるかの悲劇的偉大さをも與へた。絞首臺に登つた者は、貴族であれ、僧侶であれ、將又法律家であれ、皆衆人環視の中にフランスの犠牲者等の様な立派な



る態度を持し、彼等の如く従容として死に就いた  
そして又フランスの犠牲者等と同じ様に誇張と偉  
大さに富んだ同じ言葉を吐いて居つた。

フォルトナートの言に従へば、光榮あるミネル  
ヴァ上にカラチャロー提督を處刑せしめたネルソン  
提督の私の復讐に初つた此の悲しい犠牲者の名簿  
は、恐らくは謀反人でも又唾棄す可き卑劣なる人  
間でもなかつたルイザ、モリネス、サンフユリチェ  
を絞首臺の露と消えせしめたフェルデナンド四世  
の個人的復讐に了つてゐる。

恐らくはナポリで新聞をつくつた最初の婦人であ  
るかのエレオノーラ、フォンセーカ、ピメンテル  
は、絞首臺上に登る前従容としてコーヒを飲み、  
ブルジョウスの次の様な豫言めいた、含蓄ある言  
を吐いた。即ち『多分斯ういふことを想ひ出して  
も、いつか吾等の楽しみになるであらう』と。自己  
を辯護して死を逃れんと欲しなかつたかのガルニ  
アーノ公は、死するに當り、何をグズグズして居  
るのだと稱してグズグズして居る死刑執行人を促  
した。裁判官に侮辱せられて激怒したかのルーヴォ

伯は、懦夫の慄然として恐れをなす斷頭臺の刃を  
見るため仰向けに寝そべることを欲し、古英雄の  
如く死んで行つた。かのガブリエレ、マントネ將  
軍は自己を辯護して死を逃れるを潔しとせず、彼  
が共和國のためになしたところのものを名譽とし  
て誇つた。かの生氣潑瀾たる青年ジェンツァーノ侯  
は神々しき迄に従容として死に就いた。それがた  
め之れを環視せる王黨の群集は少くとも唯の一度  
も、ナポリ王萬歳を敢て叫ぶことが出来なかつた  
程であつた。かのフェリーチェ、マストラーンジェロ  
は斷頭臺で従容と死することをも亦誇りとした。  
かのマリオ、バガーノは著名な辯護士であつたが、  
一切の辯護を無益なりと信じた。それは専制君主  
の下に生活することを厭はしき限りのものと觀じ  
たからであつた。總て上述の天晴れ名を辱しめな  
かつた人々は初めてイタリーの地に於て従容とし  
て死に就き、巍然として死を恐れざる犠牲者の典  
型を示せるものであつた。

一七九九年の處刑者は九十九人である。此の犠  
牲者の歴史はフランチェスコ、ロモナーコによつ

て花々しく勇壯に語られ、ヴィンチェンツォ・ココによつて古代の謹嚴さを以て書かれ、ピエトロ、コルレッタによつて理想化されて、他の何にもまし、ナポリに於けるブルボン家の没落を決定してゐる。そして全イタリアに對しては、多難なる將來の血醒い酔素としての役割を勤めてゐる。

恰も暴風雨の様に通過して舊い傳統を粉碎したナポレオンのイタリア遠征そのものは、恐らく國民的意識を喪失して居つたイタリア人の間に國民的意識を覺醒せしめたに過ぎないものである。

一七八九年から一八一四年迄のイタリアの歴史此の時期に成し遂げられるに至つた社會的變革は一講演會で能く盡し得る論題ではない。余りに多くの事柄が一變し、余り多くの新しい事が起り又消えて行つた。

此の二十五年間の生活は數世紀間のそれよりも内容の豊富な、多くの事件の生滅した生活であつた。イタリアに於ける社會階級は、フランスに於けるが如く劃然と明確に分れて居らなかつた。それは社會的變革が既に行はれて居つたからである。

イタリアの騷擾がフランス革命の眩暈する様な大激動を隨伴しなかつたのは、正しく社會變革が既に行はれて居つたがためである。或時には暴動を起された相手の君主等の方が、暴動を起せる連中よりも、社會的に更に大きい、改革的の思想を抱いて居つた。そしてそのために暴動が捲き起された彼等の侵害せられたる利益は、正しく第三階級が抗爭の標的となせる其の利益を表はして居つた。我等の社會は實に、私有財産が其の全幅の力を確認せられて、舊い形態が没落した其の時代に生ぜるものである。

其の變革の中には、勝利の凱歌を揚げる階級が過度の利己心を以て達成せんと慾した何かゞなかつたか。庶民階級に生活の最低限度を保證し、彼等の最も恐しい打撃を緩和した凡ての權利を徹廢したことは、果して眞に利益であつたか。又社會の指導的支配階級の中にも浸潤し、且つ凡ゆる共同的活動を破壊せるやに見える個人主義的、原子的精神は果して眞に善きものであつたか。吾人は是等の事に就いては敢て言及をしないであらう。

又言及することを欲しない。

凡ゆる反動は其の性質として過度に赴く傾向がある。我々は今日は寧ろ是迄破壊して來た其等の形態のもの多數の復活を願ふものである。但し從來のものより新裝した、より大きい形式のものを欲するものである。個人主義的ジャコベン主義が根絶せんと欲したかの社會連帶關係の復活を願ふものである。此の度も亦人生の大河が水嵩さを

増してゐる。人生の大河の雲烟遙か彼方の水源を知らず、又此の水の流れ落ちる無限の彼方の河口を見ず、尙恐らくは將來も永久に見ないであらう我々は、善かれ、悪しかれ、常に必然的經路によつて其の滔々として晝夜を分たず、悠久に流れてゐる奔流によつて押し流されて行くのである。

(完)